

川瀬巴水 明治16年(1883)–昭和32年(1957)

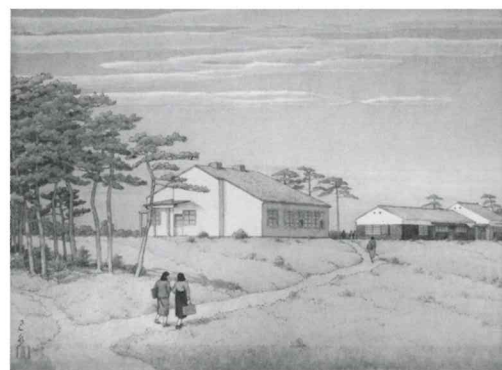


川瀬巴水 昭和14年撮影

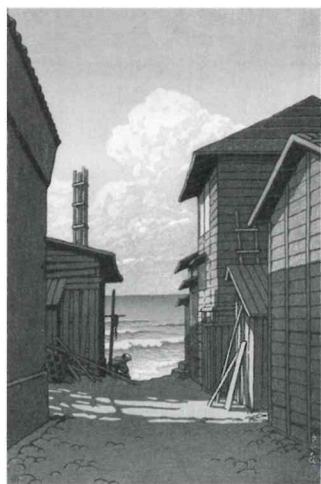
巴水は明治16年(1883)、東京都芝区(現港区)で生まれました。25歳で父親の家業を継ぐも、画家になる夢を諦めきれず、日本画家・鏗木清方の門を叩きます。しかし、20代も半ばを過ぎた遅いスタートに清方から難色を示され、洋画家の道を勧められます。巴水は、白馬会葵橋洋画研究所に入り、岡田三郎助から洋画を学びますが、洋画の世界に馴染めず、27歳の時に、一度は入門を断られた清方に再度入門を申し出て許され「巴水」の画号を与えられました。大正7年(1918)、伊東深水の版画「近江八景」に影響を受けて版画家に転向、同年の塩原三部作を皮切りに、数々の作品を渡邊版画店より発表し始めます。以後、生涯にわたり日本全国を旅して、風景版画を数多く手がけました。そして昭和27年(1952)「増上寺の雪」が伊東深水「髪」と共に無形文化財技術保存記録の作品に認定されました。そして昭和32年(1957)、74年の生涯を閉じました。

茨城キリスト教学園と川瀬巴水のつながり

巴水と茨城キリスト教学園とのつながりは、昭和23年(1948)頃、学園(当時シオン学園)からの依頼で、学園の風景画やポストカードなどを制作したことから始まったと推定されます。その後巴水は、たびたび学園を訪れ、ローガン・J・ファックス(第2代学園総長)やヴァージル・H・ローヤー(初代学園高等学校長)他、学園の教職員と様々な交流があったようです。その様子の一端は、巴水の遺した日記・制作日録等に詳しく書かれています(『川瀬巴水木版画集』毎日新聞社、所収)。また、その折に巴水が描き遺した水彩画(4点現存)やポストカード等は、学園創立当時の息吹とその校舎の美しいたたずまいを現在に伝え、学園の貴重な宝となっています。ちなみに、日本全国を旅した巴水が、これだけ多くの絵を遺した教育機関は本学園しかありません。



「短期大学家政科実習棟女子寮(春)」
水彩画 昭和25～28年頃作



「磯浜」 昭和24年作

茨城と川瀬巴水

巴水は、学園に滞在したこと等をきっかけとして、その前後の昭和10年代後半から亡くなるまでの十数年間、茨城県内をスケッチ旅行し多くの作品(特に版画)を遺しました。その作品数は「巴水とその時代を知る会」の調査に拠れば、全国の47都道府県中、第5位の多さです。一体、茨城の何が巴水の心を捉えたのでしょうか。一つには、巴水版木の親とも言える版元の渡邊庄三郎が茨城(五霞村、現猿島郡五霞町)の出身だったことが挙げられます。巴水は渡邊から茨城の美しい風物のお話を何度も聞いたのでしょうか。もう一つは、昭和初年から30年頃の茨城の風景が、巴水の理想とする日本の風景に最も近いものだったと考えられます。作家の林望氏も書かれているように(『巴水の日本憧憬』河出書房新社)、巴水版画の特徴には「水」との調和があります。茨城県には太平洋の海岸線を始め、霞ヶ浦・涸沼・利根川といった美しい水辺がここかしこにありました。

かのアップル社を設立したスティーブ・ジョブズ氏が、巴水の著名なコレクターであったことを示すように、巴水は日本国内よりも世界で注目されています。今後、巴水の名声はますます高まるだろうと予想されます。今回の講演会や展示会を通して、そうした巴水の原風景が、この茨城キリスト教学園や茨城という風土と共にあったことを知っていただければ幸いです。

■お問合せ先 茨城キリスト教学園

日立市大みか町6-11-1 JR常磐線大甕駅隣接

TEL 0294-52-3215(代) 平日9:00~17:00

Eメール kantei@icc.ac.jp http://www.icc.ac.jp/70th/

■入場無料、事前申込の必要はありません。直接会場へお越しください。

ご来場の際は、公共交通機関をご利用ください。

